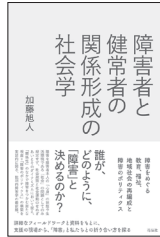


加藤旭人著

『障害者と健常者の関係形成の社会学』

——障害をめぐる教育、福祉、
地域社会の再編成と障害
のポリティクス』

評者：深田 耕一郎



障害の社会モデルのブレイクスルー

障害者と健常者はいかにして「関係」を形成してきたのか——。本書が掲げる「障害者と健常者の関係形成」という主題は古くて新しい問いである。というのも、障害者と健常者は常にその置かれた立場・条件の異なりによって葛藤が伴うからである。たとえば、障害者と健常者とは身体的条件に明確に差異がある。そうした身体的条件のために介護という「関係」が生じる。障害者は健常者の介護を受ける立場であり、ここに介護をする側／される側という非対称な「関係」が生じる。この関係がときに抑圧的に働くことがあり、それが虐待や差別と認識される。だからこそ、その非対称な「関係」を開閉するためのあり方が、この分野では模索されてきた。しかし、それはいままも十分な解は見出されておらず、現在進行形の問いとしてある。だから、古くて新しい問いなのだ。

こうした障害者と健常者の関係形成について、学問的な思考を深めてきた分野に障害学(Disability Studies)がある。ここで少し障害学を紹介すると、障害学とは、障害と社会・文化・政治・経済との相互作用を探究する研究領域として、1980年代にゾラ(Zola, I.K. 1935-

1994)らによってアメリカで創始され、その後イギリスでも発展した。イギリス障害学を代表する研究者であり実践家であったオリバー(Oliver, M. 1945-2019)は、障害を社会的な構築物として捉える「障害の社会モデル(Social Model of Disability)」を提起し、その後の障害学の世界的な展開に影響を与えた。社会モデルは、障害の原因を個体要因に求める「個人モデル」とは異なり、環境要因から理解しようとする。その点で、障害を個人の悲劇や自己責任とする枠組みから、障害者を解放する力を持った。近年では、国連の障害者権利条約の基本コンセプトに反映されるなど、「社会モデル」は現実世界に変更を迫る実効力を持つ概念として力を発揮している。

さらにここ数年の障害学においては、社会モデルのブレイクスルーを図ろうとする試みが見られる。それは社会モデルの可能性を踏まえながらも、その乗り越えるべき課題の再検討を標榜する「批判的障害学(Critical Disability Studies = CDS)」と呼ばれる潮流である。

本書は、この批判的障害学の知見を参照しながら、「障害」現象の新しい理解枠組みを提示しようとする意欲作である。具体的には、1990年代以降の日本の教育、福祉、地域活動を取り上げ、社会政策と社会運動のせめぎ合いのダイナミズムのなかから障害現象を認識しようとする。このせめぎ合いの過程を「障害のポリティクス」と概念化し、新しい障害理解へと到達しようとしている。野心的な理論展開と精力的なデータ収集によって作りあげられた労作である。

以上を踏まえると、この書評の課題は、本書が示す新しい障害理解の枠組みは、十分な説得力を持っているかを評することだろう。あるいは、批判的障害学の「切れ味のよさ」を体現しているかどうか、これを読み解くことだろう。

このような観点を持ちながら、本書の内容を見て行こう。

批判的障害学と障害のポリティクス

あらためて、本書の目的を確認すると、それは1990年代以降における教育政策、福祉政策、地域社会の再編成のなかで障害者と健常者のあいだにどのような関係のあり方が作られてきたのかを、東京都多摩地域を事例として、社会政策と社会運動の相互交渉の過程に注目して明らかにすることである。また、障害を社会政策や社会運動によるさまざまな実践がせめぎ合う場として捉え、障害が介入され変更する過程を理解することを通して、「障害のポリティクス」を描きだすことを目指している。

こうした理解の枠組みとして批判的障害学が参照されている。本書が依拠する批判的障害学の論者は「障害の政治／関係モデル」という視座を提出しているアメリカの障害学者アリソン・ケイファーである（Kafer 2013）。「障害の政治／関係モデル」のねらいは、従来の社会モデルを「障害をめぐる複雑な経験へと開くこと」であり、「障害を異なる仕方で想像すること」にあるという。

本書によれば、ケイファーの視座の新しさは次の3点にある。第一にケイファーは障害の社会モデルとは異なり、障害への医学的介入を直ちに拒否せず、障害の複雑な経験を捉えようとする。たとえば、慢性的な痛みの治癒を望みながら、同時に障害者としてアイデンティティを持ちたいといったメンタリティを認識する可能性を開く。

第二にケイファーは社会モデルが持つインペアメントとディスアビリティという二項対立的な理解の限界を批判する。つまり、インペアメントも社会的なコンテクストに依存していること、また、社会モデルが痛みや疲労といったイ

ンペアメントの「生きられた経験」を看過することを指摘し、医学的介入や治癒を望む障害者を周縁化することにつながる恐れがあることに注意を向ける。

第三にケイファーは社会モデルが前提とする「障害者」と「非障害者」という固定化された図式を批判する。二項対立的な図式がさまざまな差異を捨象してしまうからである。こうして提起される「障害の政治／関係モデル」は、障害を歴史的、政治的な文脈に位置付けることで「批評され、争われ、変形される、実践と連合の配置」として捉える。こうした「障害の政治／関係」を強調することで障害に付与された自明な想定を批判し、障害を異なった意味へ開こうとする。

このように本書は障害の生成や変更を、「政治」を含めた多様な社会関係のもとでせめぎ合うものとして把握していく。第2章「東京都多摩地域における学校週5日制の導入と地域活動の展開」では、東京都立立川養護学校の実践に着目し、学校週5日制導入を契機とした、障害者の地域活動の形成過程が記述されている。当時、立川養護学校は、知的障害児の養護学校では、全国で唯一の学校週5日制の試験校であり、この導入に対して立川養護学校のPTAが反対した。土曜日が休業日となれば、当然その時間のケアは親が担わなければならないのだから、異論が出る。それに対して、立川養護学校の教員は、障害児の教育権保障の観点から、母親たちに協力し、休業日となる土曜日に地域活動を行う。この地域活動は、保護者の自主活動となり、その後、東京都で事業化されるに至る。のちに担い手不足のため東京都の事業は2000年に終了するが、親・教員・行政のせめぎ合いの過程が見られた。

第3章「市民活動の形成と福祉事業化の社会的過程」では、地域活動によって誕生した取り

組みが、福祉事業として地域に定着していく過程が描かれる。ボランティア活動としてスタートした団体は、その後NPO法人格を取得し、宿泊事業やフリースペースの運営を始める。2000年代の社会福祉基礎構造改革以降は、福祉制度のもとに事業を展開していく。一方で、こうした福祉事業はボランティア活動として出発したグループ本来の方向性を変えていく。社会教育制度のなかでボランティアを活動原理とするグループと社会福祉制度のなかでサービスを展開するグループとで葛藤が生じた。本書はこの葛藤を「教育と福祉のジレンマ」と呼ぶ。しかし決定的な分裂にはいたらず、むしろ多様なアクターが相互作用を生み、それまでの制度では実現することのなかった、障害者と健常者の関係を形成していくことになる。

第4章「障害者の地域活動をめぐる共同性の創発的基盤の形成」では、活動の担い手たちのミクロな実践に目が向けられる。個人の個別の経験の意味づけとこのグループの活動はどのように結びついているかがインタビュー調査を中心に語られていく。「地域」の活動という抽象的な理念であることによって、参加者は柔軟な解釈で活動に参加できたという。障害当事者、障害者家族、支援者、ボランティアそれぞれが、集団としての強い共同性を構築するのではなく、幅広い意味づけを受け入れることで、決定的な対立を回避しつつ、アクター同士を緩やかに結びつけた。「地域」において人びとの緩やかな交流によって互いが「ともに育み合う仲間」として経験を共有したのだという。

第5章「障害者の音楽活動における参加者の即興的相互作用」では、参加者たちが創り出している「関係の質」を明らかにするために、この団体の音楽活動が取り上げられる。自己紹介の場面から、即興的な笑い、ユーモアをまじえながらコミュニケーションが展開されている過

程や、楽器を用いて参加者全員が即興演奏を行う「セッション」が描写される。即興演奏では「できる／できない」とは異なるコミュニケーションが形成され、状況的に振る舞いを意味づけ、その場の関係を作り替えていく実践が見られる。本書はこれを「絶えずできる／できないをめぐる非対称性を流動化させていく動態的な実践」と説明し、障害者と健常者の新しい関係を形成するための技法だと指摘している。

批判的障害学の可能性

本書の成果は、事例を通して展開されたように、障害が「社会構造的な力学による介入の場であると同時に、アクティビズムの取り組みによって意味が再創造される集合的な場」であることを明らかにしたことにあるという。また、「障害のポリティクス」の可能性は、このように「集合的な営みを絶えず呼びかけること、またそれと同時に集合的な営みを特定の枠組みに閉じ込めずに開き続けることに宿っている」という。こうした指摘の重要性は十分にあり、障害の新しい認識に向けた説得性を有していると思った。そのうえでいくつかコメントを加えてみたい。

第一に、批判的障害学の理論枠組みとしての可能性がもう少し展開されてもよかったのではないかというものだ。具体的には、本書第1章にあるケイファーの批判的障害学の視座が、もっと活かされてもよかったのではないか。もちろん、ケイファーがいうような、「障害者／健常者」や「インペアメント／ディスアビリティ」といった二項対立を流動化させ、障害の固定的な理解を相対化する試みが展開されていることはよくわかった。これは、本書では言及されていないが、J.バトラー的な、歴史的・政治的に制約された「欲望する主体」を「攪乱」するように、これまでの二項対立的な障害理解

を「攪乱」する戦略だと読むことができた。D.グッドレイの定義が引用されているように、「批判的障害学は、障害学の基本的な視座に依拠する一方で、ポストコロニアル理論、クィア理論、フェミニスト理論と結びついた新しく変革的なアジェンダを統合することを支持する人々が位置する領域」であることに納得した。

その一方で、ケイファーが述べていたような、障害をめぐる痛みや治癒を望む感覚、あるいはそれらをめぐる当事者の「生きられた経験」、いかえれば、個人モデルでも社会モデルでも捉えきれない「障害のアイデンティティ」を深く掘り下げる記述がもう少し展開されてもよかったかもしれない。「せめぎ合いのダイナミズム」を捉えることで障害理解を「攪乱」することに成功している一方で、複数のアクターの動向に目が向けられた分、障害経験の持つ意味を集中的に論じることがいささか難しくなっているようにも読んだ。というのも、評者がこれまでかかわった障害当事者の人びとの経験は、本書が論じるように、複数のアクターとのせめぎ合いのなかで経験されているという理解が成り立つものの、障害なるものはその人のなかに深く沁み込んでおり、「せめぎ合い」とだけは表現し得ないような経験であると感受されることが多い。ケイファーの視座はそのようなものへの理解を含んでいたのではなかったか。その点、本書では障害当事者の語りや身ぶりの記述がもっとなされてもよいようにも思った。

第二に、そのことと関連して、批判的障害学の「新しさ」をもう少し積極的に明示できるとよいのではないかと思った。もちろん、本書が示すように、障害をさまざまな実践による介入

の場として捉え、「障害をめぐる制約と潜在的な可能性に対して認識を開き続ける」という批判的障害学の視座は重要であり、その意義は十分理解できた。一方、こうした視座は日本の障害学においても、「批判的障害学」という言葉こそ用いられてはいないものの、展開されてきたことではないかとも感じた。たとえば、石川准の一連の仕事（石川1992, 2000）や立岩真也の自立生活運動をめぐる論考（立岩1990）は、批判的障害学が標榜するような障害理解の枠組みを備えているようにも思う。それらと異なるとすれば、どのように異なり、新しいのか。これは本書への指摘というよりは、批判的障害学への指摘だといえるが、障害という経験の複雑さや豊かさを捉え、記述するような認識力が、この新しい潮流において鍛えられていくことを期待したい。

（加藤旭人著『障害者と健常者の関係形成の社会学——障害をめぐる教育、福祉、地域社会の再編成と障害のポリティクス』花伝社、2023年2月、292 + 9頁、定価3,000円 + 税）

（ふかだ・こういちろう 女子栄養大学栄養学部准教授）

【参考文献】

- 石川准（1992）『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』新評論
- （2000）「ディスアビリティの政治学」『社会学評論』50（4）、pp.586-602.
- Kafer, A. (2013) *Feminist, Queer, Crip*. Indiana University Press.
- 立岩真也（1990）「はやく・ゆっくり——自立生活運動の生成と展開」安積ほか『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店、pp.165-226.